
IS Rock`n

ムトナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S R o c k、n

【Nコード】

N 6 4 6 8 U

【作者名】

ムトナ

【あらすじ】

「織斑イチカ」彼は世界初の男性IS操縦者にして、存在しないはずのISの所有者だった。
よくある一夏魔改造モノですよ。

000 - 1 + 1

000

どうも、初めての人ははじめまして。そうじゃない人はこんにちは。

でも俺がこうやって語るのは初めてだから、みんなはじめましてなんだがな。だが、俺はあえてこう言おう。東京こうていは。

とりあえずボケていることは伝わったか？伝わったのなら重畳だ。

さてさて、ここで一つ忠告だ。俺あ基本的にずっとこの調子でこのテンションだ。今のことについて来られない様なら、すぐさまリターントゥーホーム。回れ右が賢明だ。

正直疲れるだろう？俺も俺と似たようなやつには生涯会いたくないね。だって疲れるもん。

で、どこまで話したっけ……いや違うな、まだ何も話してなかったな。

それじゃあ改めて自己紹介。俺の名前は『織斑イチカ』。いやまあ、名義としては『一夏』なんだけれども、正直そっちは使い慣れていないのでね。

それで、今の俺の名乗りを聞いて疑問に思ったやつは素直に手を挙げろ。

いやいや、先生別に怒ってないよ。

よし、手を挙げたな——ひの、ふの……うん。

今手を上げたやつ——大丈夫だ、お前達は間違っちゃいない。そう、『間違ってる』のは俺の方だ。

とはいえ、特別何がどうこうあったわけじゃない。俺がハナから織斑じゃなかったただけなんだよ。

実のところ『その瞬間』に何があったのかは俺は知らない。

何故かって言うと言識を失ってたから。

第一発見者いわく「親方、空から男の子が！」らしい。

わけがわからないよ。

ちなみに、当時俺の肉体的な年齢は六歳相当。なんでそんな曖昧な言い方かというところやら俺は記憶喪失らしいんだな、これが。

そんな俺がなんで人並みに名のる名前があるのは、俺が最初から持っていたあるものに名が記されていたから。

それはIS——インフィニット・ストラトスの基幹部にして心臓部、その全てが記されていて秘され、その開発者である篠ノ之束のみにしか造る事の出来ないISコア。

その使用者として俺が登録され、登録者名に『イチカ』。ならばイチカは俺だろうという結論に至ったのは当然の帰結だ。

で、それに何より興味を持ったのは俺の第一発見者サマ。

いやまあ、気持ちはわかるよ？なにせ『造った覚えのない自分しか造れない物』を持った男が現われたんだ、そりゃあ興味の10や20持つだろうさ。

ここまで言えば俺を最初に見つけたヤツが誰かはわかるよな。そのいつの名前はs「姓は篠ノ之、名は束！」……うん、今モノローグに割り込んできたバカだ。

一体どうやったんだ……

……えっと、なに話してたんだっけ俺？……忘れちゃったよ。

長々と語るつもりだったけど、なんだかめんどくさくなってきちゃった……

もうとりあえずまとめて駆け足でいいや。

俺の持っていた束が造ってないうえに俺に反応する不思議ＩＳコア『未製作品』^{アウトナンバー}の無銘のＩＳ、後に『つぎはぎ』^{パッチワーク}と仮名された機体は、当時理論実証機が公式非公式含めて片手で数えられる数がよく建造されたのにもかかわらず、技術的な面では二世代は先を行っていた不思議ＩＳだった。

また、束が俺を発見した時に一緒にいて、天涯孤独の身であった織斑千冬が俺を引き取り『織斑』の姓を名乗る事に。「今の世の電子戸籍だけど、私が思うに紙媒体が一番セキュリティ高いよね」とは束の言。あいつなにやりやがった。

それとＩＳが起動できるという不思議ボディを持った俺であるが、もう一つ不思議な事として心理学的な意味での精神年齢が概ね束たちと同じくらいだったという事。わかりやすく言えば「身体は子供、頭脳は大人」状態。知識面も含めて。

おかげで千冬や束とは基本的にお互い同年同士な関係。いや、千冬は妙に姉キャラで俺を弟扱いするが。

そんなわけだから一時期「実は俺、転生者なんじゃね？」とか思ったが、前世の記憶もないし、もし本当にそうだったとしても確かめようがないので深く考えるのは止めた。

それから数年後第二回モンド・グロッソ決勝戦当日にちょっとへまして拉致られた。あれは少なくとも俺の人生最大の汚点だ。千冬には返しきれない恩と借りを作っちゃった。

その後世間から身を隠す意味も込めて、千冬が俺を探し出すのに手を借りたドイツ軍への技術指導に同行。それが終わると同時期に、今度は世間から雲隠れした束付いて行って世界中をあっちへフラフラこっちへフラフラしながら、元々拉致られる前からパッチワークを持っているからという理由で束の手伝いしてたらソフトウェア方面に目覚めちゃったＺ　Ｅ

というのが大体中学に入るまで。

軽くチートくさい生活を送ってきたけど、中学時代は至って普通。元々IS自体普段から束に預けていて、手元にあっても持ち歩いていないのでIS操者だなんて気付かれるはずも無く、ただの男として過ごしていった。そのせいで易々と拉致られた気もするが、考えると自己嫌悪に陥るので考えない。

そして中学三年次の冬。俺は約十年間の雌伏の時を経て、満を持してISが使える男だという事を世界へ発表する。

ちなみにどうして十年間時間を置いたかというと、まず単純に世間的に見て俺が幼すぎたという事と出生が怪しすぎた事。なんともまあ、政治的にどうこうするにはこれほどちよい相手もないだろう。

そしてもう一つが『パッチワーク』の存在。パッチワークは現在のISの技術レベルに換算すると『第二世代の専用機に第三世代のイメージ・インターフェイスを搭載させた2.5世代IS』となる。そしてそいつを持っていた俺が現われたのは十年前。

元々既存の兵器を指先一つでダウンさせられるISが世界を震撼させていた真つ最中に、更に十年相当も技術をブレイクスルーした機体が現われたとなっちゃあ世界がどうなるかわかったモンじゃない。

そんなわけで、パッチワークが人の目に触れても問題なくなる時期と、社会的にそれなりの意思を尊重される年齢になるのを待った結果がこの十年だ。

000-1+1

そうして春。

思惑通り向こうからIS学園に入って下さいと頼まれたおかげで、

ハナから受験勉強なんてしてなかった俺は中学三年間を遊びつくし、受験勉強で必死になってる同級生にちょっとウザがられた。くすん。ま、そんなわけでIS学園入学式にして授業初日の今日。

俺は家の戸締りをしてIS学園へと向かう。

「ロックにいつて見るか」

口をついて出たのはそんな口癖にして座右の銘。

ロックと呼ばれる音楽はカウンターカルチャー性をその起源に含んでおり「つまり、社会的に無法をするって事だよね」と、束と一緒に千冬にサムズアップして言ったらぶん殴られた。冗談だったの。

まあ、あまり社会的とは言えない生活を送ってきたという事や、性格的にも無理を通して道理を引っ込めるタイプと自覚しているの
で、その由来を知ってからは結構口癖になっている。ま、単純にロックミュージックも好きだけど。

さあて、そんなわけで――

ロックに生いこうぜ

000-1+1(後書き)

IS「イチカは、少しアレ

001

001

IS学園——ざっくばらんに言うと世界唯一の超法規的IS操縦者育成機関。

正直倍率なんて考えるだけバカらしくなってくるが俺は全部スル—してやったぜ！

まさか「学園に入って欲しくば土下座しろ」といったら、前方宙返りからの流れるようなジャンピング土下座を見せられるとは思わなかった。やりおるな、国際IS機関上層部。

とりあえず入学式は特に面白くなかったが、生徒会長が挨拶の時に壇上に上がったんだが、あの人が持っていた扇子。あれ、昔俺がふざけて作ったイメージ・インターフェースを用いた自由に文字が表示できるやつだよなあ、パチモンが出てなきゃ多分。

ちなみにどんなものかというと、有機EL技術を元に作った塗料型ディスプレイを媒体に塗る事でイメージ・インターフェースを通して任意の文字を表示させるというもの。

最近では聾啞者用の筆談装置として研究されているそうだが、イメージ・インターフェースを使ったり特殊な塗料のコストパフォーマンスがべらぼうに高いので、もっぱら金持ちの道楽用だ。

で、何でそんなもん作ったかというと、マンガとかで着用者の心情を表しているかのようにコマごとに書いてあることが変わるタスキとか、Tシャツとかあるじゃないか？アレ作りたかったんだよ。ちなみに、感情表現シリーズ第二段は、動くアホ毛だ。

閑話休題。

入学式も終え、初日にして早速授業が始まるとなかなかハードなスケジュールだ。

で、俺の席は最前列中央。

なんだこれは、女子生徒を視姦させない為の対策か？フザケるなこのやろつ。

「……くん。織斑一夏くんッ！」

「ん？」

呼ばれる声に考え事をしていて伏せていた顔を上げると、そこには束より小柄で束以上の胸を持ったモンスタースペックの副担任と山田真耶が、一生懸命さゆえか前かがみになりながら胸の前で肘を曲げて両腕で小さくガッツポーズを取っているみたいな格好のせいで胸が強調され、更にそんな状態に加え俺を上目遣いで見てくるなに？俺誘われてんの？

「あ、あのね。織斑くんの自己紹介の番でね、「あ」から始まって「お」の織斑くんのばんなのっ」

いやー、一生懸命なの可愛いねー。とはいえ、何時までもニヤニヤしてるのも真耶ちゃんが可哀想なので自己紹介しますか。

俺は席から立ち上がって、振り返り教室の中を一望する。

「俺の名前は織斑イチカ。好きなものは飛剣ツバメ返し、特技は秘剣ツバメ返し、趣味は緋剣ツバメがえ——ッ」

Bannonッ！

続けようとしたら、突如背後から硬いもので頭をぶん殴られた。この痛み、覚えがある……決して俺がMだから覚えてるわけじゃ

ないが。

そして俺は確信を持って振り返り、その人物の名を呼ぶ。

「よう、千ふ——」

Bannon!

ゆ、と続けようとしたらまたぶん殴られた。

「おおおお……いつてえええ」

「貴様はまともな自己紹介が出来ないのか。それと、ここでは織斑先生と呼べ」

頭を抑えて悶絶している俺をお構い無しにクールに言い放つ千冬。かつてここまで人道に反した行いがあつたろうか? いやない。(反語)

「山田先生、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「い、いえ、副担任ですから、これくらいはしないと……」

こんだけ人にダメージを与えておきながら、自分はちゃっかりニコポしてるとかマジパネエ。

「なんだ、何か言いたいことでもあるのか? 織斑」

「なんでもありませんよ、織斑センセ……」

目敏く俺の表情を読んだ千冬に睨まれた……

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。」

出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

うーん。千冬の奴ここ数年IS学園に勤めていたせいか、ジャーマン式スパルタ教導洗練されてね？昔は鞭一辺倒だったのに、今じゃ一見飴があるように見せかけてやっぱり鞭だけって。

とんだヘル・アンド・ヘルじゃないか、ヘブン何処いった。勇者王だって両方使ってるっていうのに……

「キヤー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

だというのに、なんなんだこの熱狂。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「処女捧げます！」

「むしろ奪ってください！」

おい待て、後半。

「……毎年よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけに馬鹿者を集中させているのか？」

案の定、軽いノリが嫌いな千冬は辟易としていたのだが、今時の子はその程度じゃへこたれなかった。

「きゃああああ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないよう躡して〜！」

訓練されすぎじゃね？これは、千冬じゃなくてもちよつと辟易としかねんぞ。

とはいえ、千冬のおかげで場も温まってきたので、千冬に妨害された自己紹介を改めてする。

「傾聴しろ、俺の名前は織斑イチカ。こんな珍しい苗字からわかるように、その織斑センセの弟だ」

そう言って一度言葉を切るのに合わせて、教室内が再び騒然としてくる。

「織斑くんって、あの千冬様の弟………？」

「それじゃあ、世界で唯一男でIS使えるのも、それが関係して………？」

うん残念、そこは因果関係が逆だ。俺がIS使える男だったから千冬の弟になつたんだがな。

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

ようし、今の台詞言つたやついいこと言つた。その反応を待っていた。

「そんなキミに朗報だ！」

そういつて代わって欲しいといった女子生徒を指差す。（マナー違反なので皆は真似しないでね）

「今なら俺の嫁に来れば、もれなく織斑センセを公然と義姉あねと呼び、そして義妹いもつと扱いされるぞ！」

俺が高らかと言い切ると、教室内に激震が走る。そして俺の頭部に激痛が走る。

「ぐう おおあああ、いつてえ えええええ！」

あまりの激痛に頭を抑えながら床の上を転がり、のた打ち回る。勢い余つて机とかにぶつかつて痛い、頭部の痛みがそんな事気にならなくなるくらい酷い。

「あまりにもふざけた事を言うからだ、馬鹿者。それと、貴様達もその手があったか。見たいな顔でこちらを見るな」

そんなバカ騒ぎを鎮めたのは学園内の時間の覇者、チャームだっ
た。

「む、時間が……さて、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そうやって教室の隅の椅子に腰を下ろす千冬。
 どうやら千冬の担当は実践のようなので、座学関係は真耶ちゃんが担当らしい。

まあ、この学校のシステムは何故か一般教養——いわゆる普通の学校で教えるような事柄も座学担当の教員の仕事であり、いわゆる小学校のようなスタイルであり、千冬は体育の先生といったところ

か。

どうでもいいが、座学担当の教師の負担多すぎね？

「ああそれと、織斑。貴様は放課後職員室へ来い」
「……うえい」

やべえ、呼び出し喰らった。

001（後書き）

くおまけ劇場く

「本当の自己紹介」

イチカ「趣味はカクテル作り、特技はカクテル作り、必殺技はスク
リュードライバー・イチカスペシャル」

千冬「イチカ、後で部屋へ来い。説教だ」

イチカ「つまみ作っていくぜ」

千冬「む……」

002

002

一時間目の授業が終わり、休み時間となるとおそらく全員といわんばかりの多くの生徒がクラスの前へと集まってくる。まあ、お目当ては十中八九俺だろうけどな。

とはいえ、視姦するならまだしもされる趣味はねーので、どこかに姿をくらますか。ちようど、気になってたヤツも居たことだし。

「なあ、ちよつといいか？」

俺が窓際の席へ赴き彼女に話しかけると、教室内のざわめきが大きくなる。

「……なんだ？」

意外とドスの利いたポニテ娘の返事に少したじろぐ。あれ、俺なんかしたっけ？

「いや、少し話したいから顔貸してくんない？篠ノ之箒ちゃん」

現時点でクラス内の自己紹介は「お」の俺で止まってしまったので、初対面の人間がさ行の彼女のフルネームを言い当てるには事前を知っている必要がある。ちなみに、残りの自己紹介は放課後のHRで行うらしい。

「……わかった。ではついて来い」

それはともかく、そのことに気付いたらしい箒は怪訝そうな顔をしながら席を立ち俺を先導する。

箒に連れられてやってきたのは屋上。流石に校舎内では大名行列かハーメルンかのように後ろから大勢がついてきていたが、流石に屋上まで着いてくる大胆なやつはいなかったようだ。

「それで、何のようだ？」

箒は手すりにもたれ掛かりながら、警戒心も露な表情で俺のことを睨みつけてくる。

「篠ノ之束……」

俺がその名を出すとあからさまに肩をびくりと震わせ、そしてその瞳は警戒色を更に増していく。決して赤色ではない。

「の、ことなんざわざわざ聞きやしないから楽にしてくれてもいいぜ」

「……………」

おかしい……何故かより一層警戒されている気がする。何故だ？

「さつさと用件を言え」

「いやなに、前々からキミの事は話には聞いてたからな。一度顔を合わせて話しをしてみたいと思ってたんだよ」

俺がそういうと、箒は急に何か考え込んで小さな名声で「話を…？千冬さんからか？」とか呟く。

ああそうか、そういえば千冬の剣の師匠は篠ノ之父で、千冬も昔は篠ノ之家に出入りしてたから箒とは顔見知りだったか。

「私のことを誰から聞いたのかは気になるがその前に、貴様は誰だ？」

「いや、誰も何も織斑「それは違うな。第一、あの人には弟なんて“居なかった”」

うお、超高校級に人の台詞に被せて論破してきたぞコイツ。それにしても流石姉妹。人の台詞にインターセプトしてくるとかやる事がそつくりだ。

「……なんだ、その顔は」

どんな表情かは知らんが、どうやら篠ノ之姉妹の共通点を思い出してたのが顔に出ていたらしい。

「ふ、姉妹揃って似たようなことするなと思ってな」

「……なに？貴様、本当に何者だ？なぜあの人のことを知っている」

あの人、ねえ。俺もあまり健全な姉弟関係とはいえんが、そんなに忌々しげに姉のことは呼ばねえぜ。

「ま、三年位前まで世話になってたんだよ」

「三年前だと？」

「ああ。だから、お前の事はあのバカからよく聞いているぜ」

箒が自分の腕を抱き寄せるようにして、俺を胡乱気に睨みつけるように真っ直ぐ見ていた瞳がついにそらされる。

ああ。確か束のやつも普段は自慢するかのように箒のことをウザイくらいに話してくんのに、姉妹関係の話になるとこんな態度とりやがる。

「はあ……まったく、だから姉妹揃って同じような反応するなや」
「え……それはどういうことだ？」

「どういうことも何も、それはお前が知らないだけだ。アイツを知っていればすぐにわかることだ」

「わ、私は別に、あの人のことなんて知りたくも無い」

口ではそう言うものの、依然目を逸らし顔には動揺の色が浮かぶ。

「そうかい。それじゃあそろそろ時間だから戻ろうぜ。早くしねえと怖い怖い担任に殴られるからな」

「ま、待て！」

「なんだよ？」

そう言っただけ箒を置いて出口へと向かう俺を呼び止める箒に、顔だけで振り返る。

「いったい、何の真似だ？何故私にそんな事を話した」

「どういっつもり？はっ、ただの余計な真似だよ」

本当、人様の家庭事情に立ち入る趣味もなきやあ、本当にサシで話しをしてみたかっただけでそんな風に箒を困らせたかったわけじゃないんだが……ああ、まったく。本当に余計な真似だよ。

「ちょっと、よろしくて?」

時は流れて二時間目の休み時間。

二時間目の間、ずっと自己嫌悪に陥っていた俺は突如掛けられた声を見ると、そこには欧州辺りの出身と思わしき金髪碧眼のロールの掛かった髪の少女が腰に手を当てて立っていた。

「……なんか用か?」

だが絶賛自己嫌悪忠でローテンションの俺のすげない返事に、金ドリ（金髪ドリルの略）少女が突如大きな声を上げる。

「まあ！なんなんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので

すから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

「自分が敬われて当然と思ってる礼儀知らずに払う礼はねえ」

「な、な、なあっ……!」

心もち、礼の後に麺と続けなくなるイントネーションで言っていると、当然の如くそれが気に食わない彼女は、俺を指差し肩を戦慄わななかせながら怒りゆえか声にならない声をあげる。

「自分に誇りを持つのはいいが、相手を見下す理由にはならねーぜ、ダイヒョーコーホセーサマよ」

「あ、あなた、最初からわかっていてっ!？」

「はっ、敬われたければそれにたる偉業をしる。生まれ程度でいい気になるな、選ばれた程度で図に乗るな。でなきゃ、いつか足元すくわれるぜ?お嬢ちゃん」

びしつと言ってやると、怒髪天を衝くというか怒りが有頂天となったというか、髪の毛が怒りで逆立っている。なるほど、これがイギリスのBT兵器の真骨頂か。

「も、もう我慢の限界ですわ……」

いや、我慢も何もしないだろう。と思ったけど口チャック。ちようどナイスタイミングで三時間目のチャイムが鳴ったから。

「う、く……覚えておきなさい！」

いまやもうそこら辺の小悪党ですら言わないような台詞を残してイギリス代表候補生、BT兵器搭載試作型第三代IS「ブルー・ティアーズ」のテストパイロット「セシリア・オルコット」がしぶしぶと自分の席へと戻る。

ううむ。第の事でちよつと鬱屈した気分だったとはいえ、いじめすぎたかな……？

「貴様達、三秒以内に席に着け。出なければ三秒以上立てないよ
うな目に合わせるぞ」

やたら物騒な事を言いながら千冬が教室に入ってきて教壇の前に立つ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

ん、なんだ？千冬にも座学の受け持ちはあったのか。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決

めないといけないな」

ふと思い出したかのようにいいながら、千冬は説明を続ける。
その説明をまとめると、要するにクラス委員長を決めるという事らしい。

「誰か意見はないか？自薦他薦は問わないぞ」

と千冬が言うと、早速手が上がる。

「はいつ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います」

教室中に、何故か俺をクラス代表にしようとする風潮が満ちていく。やべえぞ、そんな面倒なこと俺は真っ平だぞ。

「さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「織斑センセ」

「なんだ、織斑。辞退ならば認めないぞ」

「委員長であるならば、三つ編みメガネの美少女がやるべきだと思います」

「ふむ。では明日からお前はその格好で学園に来るといい」

「なんでだよ！？」

ぐお、なんて無体なお言葉！というか、千冬からそんなボケが返されてくるとは思わなかった！！

「それより織斑、貴様にはもう一度教師に対する言葉の遣い方を教えなければならぬようだな」

「ごめんなさい。勘弁してください」

ツッコミするのも命がけとか、世知辛え……

「待つてください、納得がいきませんわ!」

そこにパンツと机を叩いて勢いよく立ち上がったのは、金ドリ少女ことセシリア・オルコット。

「そのような選出は認められません!ただでさえ男がクラス代表だなんていい恥さらしだというのに、よりもよってこんなちゃんぽらんの恥知らずなんかに!」

「うむ。確かにイチ力はちゃんぽらんで恥知らずだが……」

おい、おい待て。セシリアの言う事には色々突っ込みたいが、それ以上に千冬、お前だ。

何でお前、さっきから妙にボケのスタンスなんだよ。

「そもそも。実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります。わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ありませんわ。いいですか!?クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」

余程鬱憤が溜まっていたのだろう。セシリア・オルコットの勢いはとどまる事を知らない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で——」

まずいな、攻撃対象が俺から日本になってきている。

別に俺自身日本にいた期間を全部あわせても記憶にある限りでは精々半分ほどで、日本を侮辱するような言い回しも正直どうでもいい。

だが、いくらIS学園が全世界から広く学生を募っているからといっても精々全校生徒の半分ほど……逆に言えばこの学園——は言いつぎかもしれないが少なくともクラス内で日本人を敵に回すとなれば、浮遊票を含め半数以上を敵に回すこととなり、そうなったのなら彼女がどういった扱いになるのかは考えるまでもないだろう。はあ、世話が焼ける。

「織斑センサー。イギリスの小娘が日本人のこと馬鹿にしてま——
——いつてえ！」

言い切る前に殴られた……

「余計な事は言わんでいい。それとオルコット、貴様も放課後職員室へ来るように」

「う、ぐ……わかりましたわ」

頭を抑えてひーこらしてる俺に、強い視線が突き刺さる。言わずもながら、セシリア・オルコットのものだけだ。

「もう我慢の限界ですわ！」

セシリア・オルコットは机をもう一度大きく叩き、そして俺のこゝとを指差す。

だからお前、なんか我慢してたっけ？

「決闘ですわ！あなたに代表候補生たるわたくしの実力を身を持って知っていただきますわ！」

そんな理由でIS使っているのか？という意味で千冬の方を見れば、顎に手を当てて数秒思案すると顔を上げて当事者の俺たちを見据えて言う。

「では、一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで試合を行う。この勝負に勝ったものをクラス代表とする」

おおう、俺とセシリア・オルコット、そしてクラス代表の件もまとめて解決する妙案だなあ——って、なんでだよ！というか、そんな理由でアリーナまでいいんかい。

備考。

後に真耶ちゃんから聞いたところによると、どうやら毎年1、2クラスは似たようなことをするらしい。

002（後書き）

イチカは意外とおせっかい。

003（前書き）

毎日のんびり書いたり書かなかったりしたら、いつの間にか一ヶ月以上間が空いてしまった・・・要反省。

放課後、流石に千冬の呼び出しをばっくれたら明日の太陽が拝めそうになくなるので大人しく職員室へ出頭してみれば、どうやらタツチの差で俺より先に来ていたセシリア・オルコットと職員室の隅、パーティションで仕切った一角で既に話し合いが始まっているらしい。

仕方ないので俺は仕切られたスペースの近くへ行き、二人の会話が終わるのをおとなしく待っている事にする。
すると衝立で仕切っているだけなので、中の二人の会話が聞こえてくる。

「まったく、迂闊だったなオルコット……あの馬鹿に感謝するんだぞ？」

「っ……お言葉ですが、何故わたくしがあのような男に！」

「オルコット……貴様は国家代表の候補生であるという意識が些か低いようだな」

「わ、わたくしは代表候補生である事に誇りを持ち、それに足る努力も怠ってはいませんわっ」

「それでは、やがては国の名を背負って立とうとする者が感情に任せて他国を貶めるような物言いをあも大勢の前で言うのは、代表候補生である意識が薄いとは言わないのか？」

「——！」

「ふん。代表候補生に選ばれた程度で調子に乗るなよ？小娘」

「なっ……！？」

「……成る程、その顔は既に織斑に同じようなことを言われたようだ。あれは余計な事を言っても間違った事は言わんぞ」

「……………」

「自分が口走った事、あいつに言われた事。今夜一晩、よく考えてみるのだな」

もう行っているぞ。という千冬の言葉に俺は慌てて物陰に隠れる。ここで俺が聞き耳立てて立って知れたら、気まずいどころの話じゃねえぞ。

「イチカ、いい加減入って来い」

セシリア・オルコットが職員室を出て行くまでどうにかやり過ぎて一息つくと、中から千冬に呼ばれる。

仕切られた奥にはテーブルを挟んで二台のソファーが対面に置かれて、その片方には千冬が座している。

「……ばれてたか」

「オルコットは気付いてないようだったかな」

「むしろ気付かれてたら、お前はあんな話しなかっただろうに」

千冬に名前で呼ばれたのを察し、砕けた物言いで返してみれば案の定怒られることもなく千冬もただ黙って笑ってみせるだけだ。

「それで、何の用さ？」

そう言って千冬の正面のソファーに腰を下ろす。

「用もなにも、単にお前に説教をするためだが？」

何か伏線でも張っているのかと思ったら、本当にただの説教だった！！

「あ、ありがとうございました……」

「ああ、待て。織斑」

軽く三十分近く千冬にありがたいお言葉を受け、ほうほうのていで帰ろうとすると千冬に呼び止められる。

「なんすか？織斑センセ」

ソファーから上げた腰をもう一度下ろすと「少し待っている」と言って千冬はパーティションの向こう側へと行き、今度は真耶ちゃんを連れて戻ってくる。

一体何の用なのだろうかと首をかしげていると、真耶ちゃんに一本のキーを渡された。

「これは？」

「それは織斑君の寮の部屋の鍵です」

あれ？確か俺の部屋は調整がつかないから、一週間くらい家からの通学だったと思ったんだが。

「日本政府がお前をとつと寮に放り込めとうるさかったのにな」

「お、織斑先生、その言い方はちょっと……」

千冬の身も蓋もない言い方に真耶ちゃんも言葉を濁すが、俺も概ね千冬と同じような感想なので気にしない。

「まあ寮に入る事自体はいいんすけど、荷物やらなんやら全部家なんすけど」

「それなら気にするな。荷物は既に私が手配した、ありがたく思え」

ワイ。アリガトウゴザイマスー。

「いちまるにーごー、いちまるにーごーっと……」

キーに記された部屋番号を呪文のように呟きながら目的の部屋の
前へとたどり着き、キーを鍵穴に差し込む。

あれ？開いてるじゃん。

無用心だな。と思いながらも部屋の中に入ると、そこはまるで上
等なホテルの一室のような造りで、そんじょそこのビジネスホテ
ルより余程立派だろう。

「——これは！」

荷物を置きベッドへ腰を掛けると、程よい掛け布団の反発——こ
の感触は、我等が愛しき羽毛布団！

そしてこの羽毛布団党である俺をしても未だ出会ったことのない感
触…… コレは党首に早速知らせなければならぬな。

しかし、党首は男だったな。それじゃあIS学園には入れないが
……いや、党首のことだ、一度死んだと見せかけておいてちゃっか
り女として再登場しそうだな。

そうと決まれば早速電話を——と携帯電話を手を取った矢先、部
屋の中に唯一あるドアの奥から声が聞こえてきた。

「誰かいるのか？」

ああ、そういえば寮は全室シャワー完備とかであの先がそうなの
か。

……なんて悠長に考えてる場合じゃねえ!?

「ああ、同室になった者か。こんな格好ですまないな、シャワーを使っていた。私は篠ノ之ほう……」

そうして、バスタオルを一枚身体に巻いただけというあられもない格好で扉の向こうから現われる篠ノ之箒。

流石に束の妹というべきか、しっかりと出るべきところは出て、引つ込むべきところは引つ込んで……って、悠長に考えてる間に手遅れになった!!

「お、おりむら……」

「……いやあ、箒ちゃん」

ショックのあまり処理落ちしている箒ちゃんに右手を軽く挙げて挨拶。

「っ……!み、見るな!!」

「おお。すまん」

そう言われて俺は箒ちゃんに背を向ける。

「な、な、何故貴様がここにいる!？」

「何故といわれても、俺もこの部屋だからなあ」

「な、なんだと!」

「そんなこといわれてもなあ」

「……ふざけているのか」

「そんなこといわれてもなあ」

と言った瞬間、背筋を襲った悪寒に忠実に身体を前方へ投げ出し

てその場を飛びのく。

シュツ。という渴いた音と共に俺の背中を真一文字に立とうとする木刀を紙一重で避ける。

あ、つぶねええ！

「ちょ、おまつ。殺すつもりか！？」

「避けたか……」

何でそんな今にも舌打ちしそうに忌々しげに言うんだ、この子は！？

「ジャスト、ア、モーメン！落ち着け、篝ちゃん。そんな格好でチャンバラやったらえらいことになるぞ！わかっているのか！？」

俺が言った言葉の意味に気付き、少し緩んだバスタオルを手繰り寄せその顔は真っ赤に染まる。

「で、で、で……」

「大王？」

「でていけえええ！！！」

そうして俺は篝ちゃんに追い出され、寮の前でのテント生活を余儀なくされた……ということはなく、どうにか同居には承諾してもらいました。何故俺は敬語なんだろうか？

「織斑……」

「ん、なんだい？篝ちゃん」

部屋割りの事でのアレコレをひとまず終え、互いにベットのの上に背を向かい合わせて座って一息ついているとなにより深刻そうな口調で呼ばれる。

「予め言っておく。私は正直無遠慮に他人の事情に首を突っ込むところや、自己紹介のような軽薄な態度を含めて貴様の事が気に食わない」

「万人に好かれる性格をしてとは思ってないが、そこまではつきり言われたのは初めてだな」

軽く同情を誘うかのように自嘲気味に言ってみたが当然無反応。本当に俺のことが気に入らないらしい。

いやまあ、そうだよなあ。ほぼ初対面の人間に家庭環境の説教されりゃあ、そら好感度なんてマイナス方面に累乗されるよな。あ、またちよつとへこんできた。

「それと、その箒ちゃんという呼び方も止める」

「そんなこといわれても——つぶねえ!？」

最後まで言わせろよ！何で背中向けてその上3mくらい離れてた距離を一瞬で詰めて、切りかかって来るんだよ!!

「ま、まあ冗談はともかく。正直俺としては束の妹だつていう意識の方が強いからなあ」

そもそも、箒ちゃんっていう呼び方自体束のが伝染^{うつ}ってるしなあ。

「……………」

「??」

束の話題が出たから何か言ってくるのかと思えば、返ってくるのは沈黙ばかり。

一体どうしたのかと思って篝ちゃんの顔を見てみれば、素っ頓狂な顔で俺のことを見ている。

「ん、どうかしたか？」

「いや……あの人の妹だとは言われ慣れているはずだというのに」

ああ、素っ頓狂な顔じゃなくて困惑した顔だったのか。篝ちゃんいまいち表情がうまくないみたいだな。基本仏頂面だし。

ただ、言わんとしてることはわかった。

「そりやそうだろ。世界のお尋ね者の篠ノ之束の身内としてじゃなく、俺の友人の妹として言ってるんだ。意味合いなんて変わって当然だろ？」

「う……む。そうか……」

篝ちゃんは小さな声でそう言っていると頤に手を当てて、なにやら考え込んでしまう。

「とりあえずそろそろ食堂行かないと食いっぱぐれる。考えるのは後でもできるんだ、先に晩飯にしようぜ」

いつの間にか終わりに近づいていた夕食の時間に気付いた俺は、篝ちゃんの肩を叩いて促した。

一夜明けてIS学園生活も二日目。

そろそろ俺に自己紹介してくる女子生徒が三桁になりそうで心底

辟易しながら授業を受けていると、四時間目の頭に千冬がわざわざ俺のところへやってくる。

「織斑、お前の機体だが準備まで時間がかかるそうだ」

「は？」

時間が掛かるって……別にただ単に束に預けてるだけなんだから、ゆ。パツクなりクール便なりで届けてくれればなんら問題ないんだが……（注：ISの郵送は止めましょう）

「あのバカが『主人公らしい装備思いついたから、一週間くらい借りるね』と言っていた……」

束からの伝言なのだろう、千冬は額に手を当てて深々と溜息をつく。

「なんだあいつは、馬鹿か？馬鹿なのか。つーか、バカだった！一週間後に必要だというのに一週間借りるってなに考えてんのあのバカ！？」

「なにも考えていないのだろう」

そうだった！！

「で、試合はどうすんのさ。学園の機体とか使うのか？」

束のあまりのアレ加減に思わず教師に使う言葉じゃなくなっているが、千冬も同じ気持ちらしく特にお咎めもない。

「生憎学園の予備機は現在全て出払っている。まあ、どんなに遅くとも試合開始前には届けるようには言っている。それに、もしも

遅れた場合は本気で折檻するとも言っておいた」

「そんな言い方したら、あいつ本当に試合直前に寄越してくるか、あえてお仕置きを受けたいが為にわざと遅らせてくるんじゃないか？」

「なに。その心配はないだろう」

「？どういうことさ」

殊、束に関わる事としては珍しく清々しい顔で言い切る千冬に素直に疑問をぶつける。

「非公式とはいえこれがお前のデビュー戦だ。あいつがわざわざそれを潰すような真似はしないだろう」

「あー、うん。それは負けるわけにはいかないなあ」

予想外に照れる理由だった！！

「ふっ……さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

狼狽している俺を見て満足そうに小さく笑うと、さっさと授業を始める千冬。

ちくしょう、やられたぜ……

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていませんでした」

四時間目が終わると、早速セシリア・オルコットが食いついてきた。

昨日の千冬の説教もあってか朝は売れ残った白菜みたいな感じだ

ったが、いまやすっかりもとの調子のような。

とはいえ、ぶり返されても困るから適当に発破を掛けておくか。

「そりゃあ確かに僥倖だな。代表候補生が訓練機相手にやられたら格好つかないからな」

「ふ、ふふ。まさかこのわたくしに勝つつもりでいると？現時点で専用機を持っているわたくしに対して？！」

こいつの専用機つつたら、あの遠隔砲台と偏向射撃ビットフレキブルを両立しようとして、当然の帰結として処理不足になったもんだから適性に頼らなきゃまともに扱えないブルー・ティアーズか。

ISのソフトウェア面についてある程度かじった事のある身としては、どちらか片方にすれば扱いやすさは跳ね上がるのと思う。少なくとも俺ならそうする。

というか、あの二つを両立する意味がわからない。どう考えても詰め込みすぎの典型です、ありがとうございました。

「生憎俺は勝てる勝負しかしない主義なんでね」

「貴方まさかわたくしに勝つつもりですか？」

「言つたろ？勝てる勝負しかしねえって。何ならハンデをつけてやってもいいぜ、Baby？おじょうちゃん」

俺の言葉に教室内がどつと沸き立つ

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにIS使えるかもしれないけど、いくら千冬様の弟だからって、それは言いすぎだよ」

「そうそう、それに相手は代表候補生よ。同じ一年でもあたしたちと勝負するのは全然違うわ」

そんな言葉を筆頭にやいのやいのと騒ぎ出すクラスメイト諸君。

「なんなら、わたくしの方がハンデをつけて差し上げてもよろしくてよ?」

セシリアですらそういう始末。

「……はあ」

そんな教室の空気に俺は小さく溜息をつく。

確かにISを使える女と使えない男では潜在的に圧倒的な力があるし、社会制度もそれに近い風潮となっている。だが、それは個人の力にはまったく関係ない。

それをわからずに男性に一方的に高圧的な態度をとり、それに激昂した男性が女性を傷つけたという事件も近年少くない。

「あー、はいはい。それじゃあ今の話は忘れてくれて結構だ。俺は飯を食いにいくからもう突っかかってくるなよ」

「ふっ、昨日の件でもしやと思いましたが、やはりただの愚か者のようでしたわね」

だから、突っかかってくるなって言っただろう。

これ以上相手をして長引くと飯を食い損ねかねないので手をひらひらと振って、篝ちゃんの席へと向かう。

「よー、篝ちゃん。一緒に飯食おうぜ」

「何故私に声を掛ける」

「そんな仏頂面するなよ。昨日の晩飯も今朝の朝飯も一緒に食った仲なんだ、今日の昼飯も三時の飯も晩飯前の飯も晩飯も食後の飯

も寝る前の飯も、起き抜けの飯も一緒にしようぜ」

「貴様はどれだけ食事を摂れば気が済むんだ!？」

とりあえず、イギリス人が一日に紅茶を飲む回数分くらいかなあ。

「おりむー、おりむー。私たちもお昼食べていーい？」

箒ちゃんをからかっていると、やけに裾をだぼつかせた改造制服を着た眠たげな目をした女子生徒を筆頭にした三人グループが話しかけてくる。

「えっと確か、今朝一緒だった……」

「布仏本音だよ」

「そうそう。本音ちゃん、本音ちゃん」

「私は谷本癒子!」

「私は夜竹さゆかです」

「お、おう。谷本ちゃんに夜竹ちゃんね」

僅かに頭の片隅に残っていた彼女の名前を思い出すと、他の二人も我先にと自分の名前をアピールする。

止めてくれ、俺の記憶容量はもういっぱいだ。

「さて、そんじゃ行くか」

そう言っつて、未だ渋っている箒ちゃんの腕を掴んで立たせる。

「おい待て、私は行くとは一言も言っていないぞつ。う、腕を組むなあ!」

声を荒げながら組んでた腕を振るう箒ちゃんを巧みにいなし、学

食へ引つ張つていく。

「あ、織斑君まつてー」

俺たちの後を慌てて追いかけてくる三人と共に、俺は学食のスー
プチャーハンを堪能したのであった。

篠ノ之箒友達百人化計画 4 / 100・・・のこり、96人。

なんつって。

003 (後書き)

現状第のイチカに対する好感度はセシリアに並んでワーストツートップ

004（前書き）

今更書くのもあれだが、御意見御感想待ってます

やってきましたクラス代表決定戦!!

「はい、そしてやってきません俺のIS!!」

どーすんだよ束えええ!!

「ほんと、どーすんだよう……」

あまりものどうしようもなさっぷりに本気でへこんできた。

「織斑、試合前になにを腑抜けている」

機体待ちをしているピットの中で、俺の隣にいる篤ちゃんは氷点下の視線で俺をねめつけてくる。

ちなみに何でここに篤ちゃんがいるかというと、満員御礼状態のアリーナの観客席が取れなかったからという理由らしい……ツンデレ的な意味合いがあるとうれしいなあ。

「だってさ、もう……なんなの？お前の姉は……」

「知らん。貴様の友人なのだろう」

不毛な責任の押し付け合いをしながら心底へこんでいると、急に頭を何か硬いものでぶん殴られた。

「そんなところで萎びているな。邪魔だ」

出席簿を携えて仁王立ちするは、我等が担任サマ。

「うお、いつてえ。出席簿の淵とか、南極条約違反だろ……」

「知らん。私はIS学園の校則とアラスカ条約以外守る気はない」

いや、だめだろ！もつと守るべきもん沢山あるだろ！！

「で、こんなところにまで何の用さ」

それと、お、おま……と、千冬には珍しくなにやらまごついているのを無視して、わざわざ審判の一人である千冬が管制室から降りてくる理由がわからない。

「ふん……わざわざ持ってきてやったというのに、コレは要らないようだな」

そう言っって何時の間にか人差し指と中指の間に挟まれているグレイのベルトタイプのチョーカーを見て、俺は目を輝かせる。

「いや、要ります。超要ります。つか、それがないと死ぬ！」

人間VSISの超ハンディマッチなんか想像しただけでも死ぬ。実際にやっても死ぬ。

「なら受け取れ」

投げ渡されたチョーカーを受け取り、首に巻きつける。

うーん、相変わらずこの首に何か巻いてあるのって苦手なんだよなあ。

「さあて、せっかくのデビュー戦だ、いっちょ派手に行こうじゃ

ねえか」

ようやくこの手に戻ってきた俺のIS相棒の感触に、口角を上げそれに伴って目つきも細まるのを自覚しながらそれでも、俺はその笑みを抑えようとはしない。

自分でも相当人相の悪いツラになっているのは自覚しているが、この一週間やきもきされっぱなしだったのを考慮して欲しい。と、誰に言うわけでもなく願う。

「それじゃあ二人とも、いつてくるぜ」

ISを展開することなく、ピットの発進口へ向かってゆっくりと歩を進める。

「無様な戦いはするなよ」

千冬の激励を背で受けて小さく首肯して「応」と返事を返す。

「私は正直貴様なぞ無様に負けてしまえと思っているが同室のよしみだ、勝って来いと言ってやる」

千冬に続くように続ける篝ちゃんの応援に背は向けたまま右手を真横に伸ばし、背中越しにサムズアップしてから、一言返す。

「ナイスツンデレ」

「誰がだあ！！」

ノータイムで返ってくる怒声ツッコミを聞きながらピット・ゲートを出て、滑走路の行き止まり——エリア区分上の戦闘区域バトルフィールドへその身を晒す。てつきりISを纏った姿で現われるであろうと思っていたアリー

ナにいる全ての人間が、生身で姿を現した俺に度肝を抜かれている。それもそのはずだ、試合は既に始まっている。というか、アリーナ使用時間の関係で試合開始のシグナルが鳴っていたにもかかわらず俺のISがさっきまで届いてなかったのだが。

「あら？　ようやく姿を現したと思いましたが、そのような貧相な格好で……サレンダー　もしか降参なさるおつもりですか？」

今なら特別に受け入れて差し上げますわよ。ただし、わたくしの奴隷になるのでしたらね。とおよそ高度四〇の位置で待機していたセシリア・オルコットが続けるのに対して、俺は「え、なに？」と言いながら、手を耳に当てて「聞こえない」というジェスチャーをすると、「しまった」6割「ぐぬぬぬ」4割な表情をセシリア・オルコットが返してくる。

まあ、装甲を展開しないでハイパーセンサーだけは起動させているので本当はばっちり見聞きできているのだが、受信機を持たない生身の相手にオーブンチャネルでわざわざ話しかけるといふ間抜けっぷりを披露しているのだ、ただおちよくっているだけなのだ。

「まあ、冗談はさておき……」

あまり遊んでいても話しが進まないの、今度こそオーブンチャネルで不敵に話しかける。

「俺のISにはちょっと面白いギミックがあつてな……せつかくだからそれを見せてやる。
アウェイク

起動、パッチワーク——モード・ネイキッド」

言つに合わせてISを起動、展開させる。

「な、なんですの！？その姿は」

思惑通りのセシリア・オルコットの驚きと戸惑いの声に、俺は小さくほくそえむ。

ISを展開したにもかかわらず、俺の姿はISスーツ状態とはほぼ変わらない。

いや、正確には両腕と両足のスキナーマート、肩と膝と背にあるプロテクター状のコ接続用部品ネクタパーツのみの姿。

その見た目に違わず本来のISという物と比較すれば、まさに裸ネイキッド仕様。

「まだまだ驚くのには早いぜ。キャストアーマーズ、パターンセレクト——コール・ガンナー！」

本当ならわざわざ口に出す必要もないのだが、ここはインパクトとかつこよさ重視で声に出して叫ぶ。誰だ、厨二とか言った奴は。

俺の命令コールにあわせて、パッチワークの装着装甲キャストアーマーが、ネイキッドに文字通り装着され——され……ない。あれ？

「急に大声を張り上げたと思ったら、なんなんですの？」

そう、呆れ顔のセシリア・オルコットが言うとおりネイキッドの姿が変わる事がなく——

「あれ？コール、ガンナー！……ガンナー！」

何度呼び出しても一向に現われない。

え、なにこれ。え？何、反抗期？

「ふ、ふふふふ。そのような不完全な機体でわたくしに大見得を

切って、どれだけわたくしを馬鹿にすれば気が済みますの!？」

待ちぼうけを食わされ肩透かしを食らって、いよいよ目が据わってきたセシリア・オルコットが六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』を発射態勢に移したとハイパーセンサーに表示される。

そして忠告も躊躇もなしに、その引き金が引かれる。何度も言っているが、既に試合は始まっているのだ。

「おわ!」

慌てておよそ地上10mほどの位置にあるピットゲートから飛び降り、狙撃を回避してISのステータスメニューに目を走らせる。

『Passive Inertial Canceller: active』

Power Assist: online

Absolute Saver: active

Back Task: Adaptation of weapons and armors: 92% Please wait 15 minutes』

PICもパワーアシストも絶対防御も働いてる……よし、これで死ぬ事はない!

じゃない、バックタスクで装甲の武装との適合化だと?これか、装甲がさつきから展開^{だせ}できないのは!

何でこんな事になってるのかは……考えるまでもないな、束のせいだな。

てな事を考えながらPICで落下の衝撃を殺して地面に着地。

そのままパワーアシストを全開にして地面を力強く蹴り、一気にトップスピードでその場を離れる。

するとちょうど背後でスターライトによる二射目が着弾。その衝撃波で崩れそうになる体勢をP I Cと足を踏ん張る事で耐えて、そのままアリーナ上を走り回る。だって推進器がないんだもの。

「くう、ちよこまかと！」

苛立ちを露にした声で何度も引き金を引くセシリア・オルコットだが、俺はパワーアシストによって驚異的に跳ね上がった脚力とP I Cによる物理法則を無視した制動によって、ほぼトップスピードを維持したままノーウェイトで鋭角ターンを決めて銃弾を避ける。

高速化における速度を落とさない鋭角的な動きは、どんなにP I Cを積んで従来の航空機を圧倒する旋回性と小回りを実現したI Sと言えども、おそらくよほど高性能のマルチスラスターを装備していなければ不可能な動きであろう。

同時にいくらか高い射撃技術を持っていたとしても、訓練下での仮想敵が行う機動を凌駕した軌道で動く今の俺を捕らえる事は容易ではない。

もっとも、代表候補生となり射撃特化機を宛がわれた彼女のポテンシャルを考えれば、脚力だけのこの速度のこの動きに慣れるのは時間の問題だろうし、なによりあくまでそれはスターライト一丁のこと。ブルー・ティアーズを使い始めたのなら――

「……そのような貧弱な姿相手に使うまでも無いと思っていましたが、これ以上は時間の無駄ですわ」

ついにブルー・ティアーズのバックパックユニットからフィン状のパーツが四機分離し、セシリア・オルコットの周囲に位置取り各々が俺に向かって銃口鎌首をもたげる。

ちっ、やっぱり十五分間ライフルだけってのは希望観測が過ぎたみたいだな。適合化の残り時間は七分。半分以上は時間を稼げてラッキーだったと見るべきか。

「お行きなさい『ブルー・ティアーズ』、あの男にわたくしたちのワルツを教えて差し上げなさい！」

随伴状態だったブルー・ティアーズに指示が出されると、四機はそれぞれが前後左右地上を這うように俺の周囲に飛来すると、その銃口からの十字砲火が始まる。

「ふふ、その無様な姿を何時まで晒してられるかしら？」

なんかもう、完全に女王様モードに入っちゃってるセシリア・オルコットの先程より圧倒的に密度の上がり、まるで狩りのように俺を追い立てるような砲撃をギリギリでかいくぐり走り続けると、やがて目の前にアリーナの壁が迫る。

「どうしました？そこは行き止まりですよ」

「そんなことあ……知ってる！」

目の前が壁ということもあり、わざわざ正面に設置されなかったビットに内心感謝しつつ、速度を殺さず——いやいつそ勢いをつけて俺はアリーナの壁を力強く蹴りつける。

そしてそのタイミングに合わせて、ISに指示を送りつける。

『PIC効果反転、ベクトルを脚部裏面に一極化——』

その指示通りに、今まで慣性という楔から俺の身体を解き放っていたPICが文字通り効果を反転させトップスピードでアリーナの

壁につきたてた足の勢いを殺さずに、時速数百kmの速度で壁に突っ込んだ勢いで生じる強烈な縦Gを二本の足で耐えながら、俺は脚を動かし続ける。

「ぐうおおおお」

通常重力抵抗によって消える慣性を本来ならば打ち消す方向であるPICの効果を反転することによって維持させることで、強引に壁に接地することで可能とする壁走り。
ウォールラン

「あなたは何処の忍者ですの!？」

正直、PICのちよつとした応用だ。とかボケたかったが身体に掛かる負担のせいでそれどころじゃなかったので黙って遮断シールドを含めたアリーナの外周を駆け登る。

「くっ、ブルー・ティアーズ!」

意外と素早く立ち直ったセシリア・オルコットが四機のビットに指示を慌てて出す。が、よほど壁走りに驚いたのか、ビットの命中精度は驚くほどに精彩を欠いていて避ける事はいつそ地上にいたときよりも容易い。

だがPICである程度維持しているとはいえ完全に重力の束縛からは逃れることは出来ず、次第に壁に突っ込んだ時の勢いもそろそろ失われてきた。

さて、一体これからどうするべきか。もう一度壁走りが通用する相手でもないし、そもそもそんな状況へ移すことを許しはしないだろう。

しかも適合化完了までの残り時間は約一五〇秒。後この状態でできる事といったら、もうワンアプローチ+はったりによる時間稼ぎ

が関の山か。

ならばと覚悟を決め、進行方向をセシリア・オルコットの頭上へと定める。

アリーナ上部、遮断シールドの上を走りながらハイパーセンサーに表示される残り予測歩数を確認するとそこには「6」の数字。対して目的地への必要残り歩数はおよそ四歩。

「そろそろ壁を走るのも限界ではなくて？歩幅が狭くなってきてますわよ？」

セシリア・オルコットの指摘どおり、足元に掛かるベクトルを制御した慣性は小さくなり、同じ勢いで足を踏みしめて前進しようとしても今や勢いの殆どが重力に持っていかれる。

そして一方俺の不利を見て次第に余裕を取り戻してきたのか、俺の機動力が落ちているのを差し引いてもその命中精度は上がったきている……いや、メンタル弱すぎだろ。テンションの上下でそこまですわっちゃうダメだろ。それともあれか、H・A・L・Oでも積んでるのか？それなら俺も欲しいわ。

とりあえず気持ちを切り替え一歩踏み出すと、後ろと頭上……いや、頭下か？ちょうど天地逆さになってるから判りづらい——からビットがそれぞれ一機ずつ追いつがってくる。操る数を減らして狙いを絞るつもりか。

甘いな、そんなことをするくらいならはじめからスターライトを使うべきだ。

残り五歩。セシリア・オルコットまで三歩。

後方から放たれるレーザーを無理せずにステップで避け次にステップの先、至近距離のビットへ向かってPICを切って頭上／直下から狙っている砲口からレーザーが放たれる前に俺は真っ直ぐ／真

っ逆様に飛ぶ／落ち、身体を上下反転しながらビットを足蹴にして砲口をずらす。

彼方に飛んでいく青い軌跡を尻目に再びP I Cを起動。

足場にしたビットを踏み碎きながら、一気に地上へと飛び降りる。

「なあ、セシリア・オルコット」

着地の衝撃によって巻き起こる砂煙をよそに、俺はセシリア・オルコットへゆつくりとした口調で話しかける。

地上に降りるまでに稼げた時間は約二〇秒。後二分強時間を稼ぐのであれば、ここで俺の話に乗ってくれるのでなければそこでジ・エンドだ。

「お前は俺に対して五つほど間違いを犯した」

親指を除いた四本の指を広げた右手をこれ見よがしに彼女に向かって突きつける。

これだけやっておいてあっさり撃たれればものすごく間抜けだ。

ちなみに俺だったら問答無用で撃ち抜くが。

「なかなか面白いことを仰りますわね。冥土の土産として聞いて差し上げてもよろしくてよ」

スターライト並びに、彼女の側に集まったブルー・ティアーズ全てがこちらに砲門を向けてはいるが、サディスティックにそして興味深げに俺の言葉に耳を傾けるポーズをとる。

かかった！！と心の中で喝采しつつも、表情は冷静に「まず一つ」と言って小指を折り曲げる。

「今の俺みたいな手ぶらの相手に神経質なまでに距離を取りすぎ

だ。安全の位置をキープするのがスナイパーの常とはいえ、ビットを使って対象との相対位置がいくら詰まっているからって狙いを定めているのはお前自身なんだ。距離を開けて一定の精度で狙いを定めようとすればそれだけ発射までのタイムロスが大きくなる」

だからこそ、時間稼ぎに終始していた俺には秒間当たりの攻撃回数が減っていて助かったのだが。

「次に二つ目」

次に薬指を折り曲げる。

「戦術構成が単調すぎる。意識的な死角を狙うのは評価できるが、あらゆる攻撃がその為だけに終始していたから狙いを誘導させるのは大分楽だったぜ」

このため面攻撃への危険度は当初予定していたものより大幅に下がった。

「三つ目」

そう言っ て中指を曲げる。

「根本的に俺のことをなめてかかりすぎる。自身を持つのは結構だ、だがそれと相手の能力を自分より下に見るのは戦う者としては論外だ。そんなんだからいちいち俺のアクションに対して動揺しすぎる。壁走りした時のビットの命中精度なんか目も当てられないぞ」

おかげで、十五分の内半分以上をライフル一本から逃げるだけで済んだし、万全と言えない足場である壁を走っても攻撃を避け続け

られたがな。

「そして最後」

右手を下ろして、上空のセシリア・オルコットを改めて挑発的な表情で見上げる。

「わざわざ俺のこんな時間稼ぎに付き合って、IS展開から計十五分間俺を仕留められなかった事だ」

「——ッ、ブルー・ティアーズ！」

「遅え！！」

その真意はつかめなかったであろうが、俺の表情と台詞に慌ててセシリア・オルコットはブルー・ティアーズに指示を送り自らもスターライトmk?の引き金を引くが、もう遅い。

既に俺のハイパーセンサーには『extension ready 装甲展開準備完了』の文字が表示されている。

計四本のレーザーが俺の立っていた位置に降り注ぐ光景を、それよりも早く展開した推進器によって大きく離れた位置で見る。

「その機体は打鉄？……いえ、フォームは似ていますが、別物ですわね」

今度こそ正しく展開された俺のISの姿を見てセシリア・オルコットはそう結論付ける。

耐久値を優先したことによって肥大化した腕部と脚部のパーツと、まるでフレアスカートのように足回りを大きく囲む大型の腰部サイドアーマー。

確かに一見して今のパッチワークのフォームは第二世代ISである打鉄に似ているが、両肩のアンロックユニットである小型シール

ドの代わりに、左腕には身体の半身を隠すような大型のシールドがマウントされていることや、脚部が膝から足先までの一体型ではなく、足首を持ったタイプなど相違点は多々ある。

セシリア・オルコットの言ったように、確かに似ているが打鉄とはまったくの別物である。第一コイツが打鉄に似ているのではなく、打鉄がコイツに似ているのだが……わざわざ今指摘することじゃない。

「は、ははッ——」

そんなことより俺は展開された装甲のステータスをチェックしながら、沸き上ってくる感情のまま笑い声を漏らした。

004（後書き）

IS稼動年数十年は伊達じゃないというチート具合のイチカ
約15分主に脚力だけで避け続けるって、書いた後で見直してみてもやりすぎだったと思う（何
機体の詳しいスペックについてはそのうち

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6468u/>

IS Rock`n

2011年8月28日20時21分発行